

受賞論文 Vol.1

BUT 短縮型ドライアイにおける症状と
角膜痛覚過敏との関係

Relationship of corneal pain sensitivity with dry eye symptoms in
dry eye with short tear break-up time.

Kaido M, Kawashima M, Ishida R, Tsubota K. Invest Ophthalmol
Vis Sci. 2016 ; 57: 914-9.

KEY WORDS

涙液安定性 / BUT 短縮型ドライアイ / 角膜知覚 /
角膜痛覚 / Cochet-Bonnet 角膜知覚計



海道美奈子 Minako Kaido
和田眼科医院副院長
慶應義塾大学医学部眼科学教室非常勤講師
信濃坂クリニック
E-mail : fwiw1193@mb.infoweb.ne.jp

【はじめに】

この度は、2017年ドライアイリサーチアワードを拝受させて頂き、心より御礼申し上げます。本アワードを頂きました論文は2016年5月、『Investigative Ophthalmology & Visual Science』に掲載されました「BUT 短縮型ドライアイにおける症状と角膜痛覚過敏との関係: Relationship of corneal pain sensitivity with dry eye symptoms in dry eye with short tear break-up time」です¹⁾。本稿では私がドライアイに携わるようになった経緯を紹介し、本論文を簡単に解説します。

【ドライアイに携わるようになった経緯】

私がドライアイに携わるようになったのは、1995年より東京歯科大学市川総合病院で坪田一男先生のもとで仕事をするようになってからです。当時は研究への特別な意欲があるわけではなく、普通に外来や手術をこなせばよいと思っており、ドライアイを研究したいというはっきりした展望はありませんでした。しかし、ドライアイ外来では常にドライアイに関する新しい知見や奇想天外な面白い考え方を坪田先生から教えて頂き、興味のあることも、そうでないことも「研究しなさいよ」という一言で研究するはめになりました。「やりたくないな～」と思い、放置している研究に対して、「あの研究、どうなってる？」と

催促され、なんとか最後までやり通すという感じでした。私の眼科に対する「普通」の態度をみて、きっと私に対してあまり期待されてなかったのではないかと思います。しかし、坪田先生は誰に対してもチャンスを与えてくださいます。けなされると意欲がなくなってしまう性格の私ですが、少しできるとほめてくださる坪田先生とは非常に性が合い、データをまとめ、学会で発表するという面白さを少しずつ感じるようになりました。最近では、研究成果を論文にまとめる作業にやり甲斐を感じるようになり(以前の私には考えられなかった姿です)、1つのことをやり続けることがいかに大事なことであるかを実感しています。生涯前進、知らない自分を見出すことは非常に心地よく、これからも仕事にまじめに取り組んでいきたい所存です。

【本研究のきっかけ】

ドライアイの疫学調査、Osaka Studyが本邦で行われ、visual display terminals(VDT)作業者のドライアイ罹患率は65.5%、そのうち涙液安定性が低下しているタイプ、いわゆるBUT短縮型ドライアイが約80%に及ぶことが示されました²⁾。つまりBUT短縮型ドライアイは、ドライアイを考えるうえで非常に重要な位置を占めるといえます。BUT短縮型ドライアイは上皮障害がほとんど認められないにもかかわらず、涙液分泌低下型と同等レベルで症状が強いのが特徴です。涙液分泌